

居場所型デイケアのもつ可能性

——〈私〉が〈育つ〉場の治療——

近藤 真帆

京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 近年, 我が国における精神障害者支援は「目標・目的地志向型」に大きく傾き, 格差や疎外を生み出しつつある。一方で障害者自立支援法施行以前は豊富にあった「居場所型」支援は, 悪質な「囲い込み」との質的区別の問題を乗り越えられず, 廃れゆく途上にある。本稿では居場所型デイケアの丁寧な質的記述を通し, 居場所型と囲い込みとを区別することと, 現行の支援傾向を再検討することを目的とした。結果・考察から居場所型には隣の他者からのまなざしや, 共同体的かわりがあることを明らかにし, 「囲い込み」との違いを明確にした。さらに居場所型における〈私〉の〈育ち〉を支える側面を提示し, 現行の支援における居場所型の重要性を指摘した。

1. 問題

1.1. 精神障害者支援の近年の社会的動向

かつては入院治療中心だった我が国の精神医療は, 地域ケアへの移行が進み, 近年は入院期間の短縮, 訪問看護・就労支援などのサービス拡大が一定程度実現されている。収容所精神病院への世界的批判の結果, 我が国の病床数は戦後最大となった平成6年の362,847床¹⁾から平成28年末の333,917床と, 約20年で28,930床減っている²⁾。厚生省・労働省の合併による労働と福祉の一体化体制(若林, 2012), 2006年の障害者自立支援法施行, 一部市場原理の流入などを受け, 就労を主眼に置くサービスの充実は特に顕著であり, 2018年4月から始まる精神障害者の雇用義務化も強く意識されている。こうした変化は世界水準では遅々としたものと指摘されがちだが, 精神障害者たちが地域で暮らし, 経済的自立に向かいつつあることを一定の進歩と見るのが一般的である。

こうした動向の中間期に, デイケア(デイとも表記。本論文では精神科デイケアのみを指す)というチーム医療形態があった。もともとは戦後の

欧米で発展したコミュニティケアを参照する形で, 日本では1960年ごろに発足したものである。当時の厚生省は長期入院患者の退院促進効果や自立までの中間的位置づけをデイケアに期待し, 1980年ごろから診療報酬による経済的裏付けを整えた。その結果, デイケアの施設数は急増し(浅野, 2015), デイケア, ナイトケア, ショートケアと診療報酬制度も整えられていったが, 2000年以降は政府からの風当たりが強まり, 現場の実態に沿わない厳格な施設基準が設けられるようになった。そうした背景には, 国が期待するほどの病床数減少がなかったこと(伊藤, 2016), デイケアにおけるプログラム活動が政府関係者の目には無為な活動に見えたこと(窪田, 2001)などがあった。デイケアへの懐疑から, 政府は治療効果の数値的エビデンスの提示を求めようになり, かつては多様な支援報告がされていたデイケア実践研究は, 尺度開発や明確な数値データの提示に邁進するようになった。しかし政府関係者からは満足なデータが提示されたとはみなされず, 政府の福祉と労働の一体化体制も手伝い, デイケアへの評価は低迷した。最近では2015年にある診療所デイケアの「囲い込み」が報道され, 2016年の診

療報酬改定ではかねてより問題となっていたデイケアの長期利用を取り締まる制度が採択された。デイケアは全国的に経営危機へと追い込まれていく見込みである。

1.2. 合理化・効率化される支援

2006年以前はデイケア同様にそれまで退院患者の地域生活における居場所として機能していた作業所も、障害者自立支援法の施行を受けて明確な目標や施設基準の下、通所者の就労やスキル獲得を主眼に営まれるようになった。治療機関であるデイケアでも、機能や効果について厳しい基準が意識され、専門化・機能分化が進められるようになった。

本論文では現在の作業所や就労移行支援施設、あるいは明確な目標を掲げるデイケアのことを「目標・目的志向型」とひとまとめにして呼ぶ。目標・目的志向型は、目標に照らした現状の評価や治療・支援効果の測定が比較的しやすい。つまり作業結果や就労移行率などの数値を用いて「成果を上げる施設」が画一的基準の下で判別可能なのである。一見合理的なこの支援形態の下、数値的改善を追い求める姿勢に対しては、支援者側も患者側も、疑いを差し挟む余地がなくなりつつあるのが現状である。そこでは就労・経済的自立が無批判に肯定され、社会復帰と経済的自立が安易に同一視されている。

しかし、そのような就労支援は精神障害者たちの中でも、比較的作業や就労にはまりやすい者しか対象にできない。目標・目的志向型に傾いた現在の風潮は、症状の重い、あるいは、様々な理由で作業が向かない精神障害者たちを疎外することにつながりかねないと筆者は考えている。

目標・目的志向型とは常に「未だ目標に満たない者」として患者をまなざす前提をもつ。さらにそれが就労支援や生活訓練施設であれば、必然的に患者は「能力・スキル欠如者」としてみなされることになる。支援者のまなざしは患者本人にも取り込まれていくことを考慮すれば、支援者は自らのまなざしに常に反省的でなければならないが、目標・目的志向型が無批判に前提されている風潮の中ではその姿勢をもつことさえ困難となってい

る。むしろ数値的改善ばかりを追いかける姿勢は加速するばかりで、病棟における入院期間の不当な短縮、作業所による作業効率・就労率最優先の人員採択・切り捨てが発生している。

そうした動向のしわ寄せを受けた当事者たちは、どこへ行くのか。かろうじて目標・目的を掲げない施設に辿りつき居場所を得ることもある。しかし、社会の側が就労、自立を強迫するような環境の中では、たとえ通所できる施設ができたとして、そこを心から安心できる居場所として体験することは難しい。また、目標・目的志向でない施設は減少の一途を辿っているため、当事者たちがその存在を知る機会を得ない場合も多い。すると当事者たちの中には地域に暮らせど引きこもるほかない、あるいは、心的にはこの世界のどこにも居場所がない、と感じる者たちが一定以上生まれるのではないか。それではまさに形だけの地域開放にすぎないのであって、むしろ病棟にいたときよりも治療や支援が手薄になっていることになる。

筆者は決して、目標・目的型支援自体を否定するものではない。心底働きたい、あるいは仕事に戻りたい（リワークしたい）者にとって、現在の支援は手厚いものである。しかし作業・就労第一主義的風潮が過度に加速することで、強迫的に追い立てられ、支援によってかえって負担感や疎外感を感じるようになる当事者たちも増えているのではないか。支援とは誰の、何のための支援なのか、支援とは何なのかについて今一度考えてみることで、現に生じつつあるように見える精神障害者間の格差・疎外を防ぐための方向性を模索する必要があるのではないかと考える。

1.3. 居場所と「囲い込み」

障害者自立支援法成立以前は、施設ごとに特徴はさまざまであるものの、デイケアも作業所も精神障害者の地域の居場所としてあった。しかし法律施行後は、多くの作業所が目標・目的志向型に特化していくこととなった。その一方、「居場所型」の施設では、今も昼寝をしたり、ゲームをしたりと、メンバーそれぞれの自由な活動を保障している。以下では特にそうした施設の具体例として居場所型デイケアを扱っていく。

現在、居場所型デイケアは政府からの厳しい評価にさらされ、実践者たちは施設存続のために、治療効果についての数値的エビデンスの提示や、運営形態の機能分化、就労を促す目標・目的志向型への切り替えを模索している（中村，2006；窪田，2006；2016）。しかし筆者は、こうした動向によって単なる「囲い込み」施設と居場所型施設の区別がより困難になり、目標・目的志向型への偏重に拍車がかかっているのではないかと考えている。

確かに、居場所型デイケアは、単なる囲い込み施設と一見区別がつきづらい側面がある。2015年に囲い込みの実態が問題視された先述の施設について、当時の報道³⁾はその貧困ビジネス的な側面を強調していたが、取材をされた元通所者はデイケアでの活動やスタッフの姿勢についても言及していた。曰く、クリニックのデイケアはボードゲームやクロスワードパズルをさせておきだけ、スタッフは居眠り、相談しても「自分で考えましょう」といった返答ばかりだったという。また、就労したかったのに支援がなかった、という発言もあった。

このように「居場所型」を謳いつつ、それを隠れ蓑にして通所者を囲い込んでおくだけの実践は、すでに十数年前に古屋（2000）が「悪徳デイケア」として指摘したものである。そこで定義された「悪徳デイケア」は、活動参加を促さない、単純反復作業をさせる、昼食だけ摂らせる、スタッフの関与しない活動をさせる、といったものであった。

しかし筆者の考えとしては、こうした事態の有無のみで悪徳デイケアか否かは判断できない。なぜなら、例えばなんとかデイルームまでは来たけれど症状が辛い場合、無理なプログラム参加が病状の悪化につながるため、活動を促さない方がよいときもある。あるいは、患者のひきこもりがあまりに深刻なとき、まずはデイケアで昼ご飯だけでも一緒に食べよう、と声をかけるケースは、悪徳と言えず、むしろ患者の治療に寄与するような実践である可能性が高い。また、居場所型の施設にも報道された囲い込み施設同様、ボードゲームなどはあるであろうし、治療を優先するために就

労希望をいさめることもあるだろう。

つまり、本来の意味での居場所型施設と囲い込み施設は、質的に全く異なりながら、行為水準での区別が難しいのである。それでは、先行研究においてこの区別に必要な議論は十分されてきたのだろうか。

1.4. デイケア先行研究

2000年前後のデイケア（居場所型に限らない）の先行研究には、多様な実践の報告が数多くあった（安井・野原・染谷，1997）。しかし近年、エビデンスベースドアプローチにこだわるあまり、実践の中でも数値で測れる部分だけを切り取った研究が増えている（原，2016）。だが、そもそも精神の病の治療や癒しは、単純な数値によっては捉えがたいものである。それを測るために無理な尺度開発、数値化を推し進めることによって、かえってデイケアの実践そのものが見えづらく、理解され難くなってしまった感がある。皮肉なことではあるが、デイケアの関係者・研究者の多くは言語化しがたい居場所型デイケアの意義を現場での何らかの手ごたえのようなものとして感じているにもかかわらず、そうした言葉にならないもの、捉えがたいものを無理に数値に変換しようとした（渡辺，2010）ことで、かえってその本質を取りこぼし、伝え損ねてきてしまったのである。そしてそうした動向の中で、行為水準では明確に区別しがたい囲い込み施設と居場所型デイケアの「質の違い」も、一層見えにくくなってしまったのだと思われる。

ただしそんな中、数は少ないながらも、居場所型デイケアにおける実践の様相をなんとか伝えようと試みる研究があったことも確かである。北岡（2013）は一方向に先導する形ではない居場所型デイケアが「本当の出会い」を生じさせる「触媒的営み」をもつという、重要な側面を指摘している。また、山崎（2016a）は「居場所型支援は古いから駄目、囲い込みと同じだ」とする声に回答するため、2つの事例から、通所者の「社会性の身に着け」には本人が社会に合わせる努力ばかりが必要なのでなく、他者との相互作用が重要であると指摘したこと、そうしたあり方を居場所が

“場”として支えていることを指摘した。彼女はさらに「居場所の堪能の先に、自然と他の居場所へ触手が動く」として、そうした体験へのつながりを支えることがデイケアスタッフの役割だとしている。

これらの研究は居場所型支援の有効性を明確化しようとしたものとして評価できるが、問題点がないわけではない。例えば、北岡（2013）は居場所型デイケアを「可能性を内包した未分化な余白」と結論付けているが、こうした捉え方では、「通常あるべき支援の姿」とは専門分化された目標・目的志向型であり、そこまでは分化していない（未分化な）居場所型デイケアは、目標・目的志向型の「余白」において、細々と運営を続けておれば良い、という見方を乗り越えられないのではないか。また、「本当の出会い」や「触媒的営み」の内容が明確であるとは言い難く、ニュアンスの域を出ない感もある。山崎（2016a）の示している事例は、治療者側からの視点による通所者の行動変化の記述にとどまる点、“場”という居場所の全体性に着目しながらも、その場の実相を描出することなくスタッフの役割について簡便に提言するにとどまる点に不満が残る。

ちなみに、デイケア学会における居場所についてのシンポジウムで、山崎（2016b）は居場所というキーワードがお粗末なデイケア運営の隠れ蓑になっている可能性や、これまでのデイケア研究が実践報告ばかりで学術的根拠に裏付けられた研究や報告がないことを挙げている。つまり、筆者が上に指摘してきた居場所型デイケアと悪徳の囲い込み施設の違いを明確化する必要があるという問題意識は、こうしたデイケア研究者のあいだでも共有されてきたものなのである。

2. 目 的

以上のように、居場所型デイケアの現場関係者・研究者たちがある種の手ごたえとして感じてきたその意義は、数値化や、単なる通所者の行動変容を促す実践報告としてまとめるといった形では十分に明らかにならない。むしろそれは、現場の支援者・通所者の経験を彼らの実感に沿った形

で丁寧に記述することを通してしか、明らかにならないものなのではないか。そうした作業を通じてこそ初めて、居場所型施設と単なる囲い込み施設との違いがどこにあるのかも、はっきりさせることができるだろう。

そこで本論文では、デイケア通所者の思いや実感を丁寧に描き出していくという方法によって、現場で確かに感じられる通所者のありようの変化や、それを傍らで感じる支援者（筆者）の実感、手ごたえの実相を明らかにする。そしてその描出から、居場所型施設と囲い込み施設の違いがどこにあるのかを明確にし、目標・目的志向型に傾いた現在の動向に孕まれる危険性について考えていくこととする。

3. 方 法

3.1. 方法論の検討

これまで数量的方法で取りこぼされてきたデイケアの通所者や支援者の思いや実感、変化の手ごたえなどの内実を明らかにしようとするならば、必然的に質的方法を中心に検討することとなる。その際、最大の問題は、現場に身を置いている者に感受されている実感を、読む者にどうやって伝えるかということであろう。そのような数値化や言語化の難しい曖昧なものをすくい上げる方法論を模索すると、エピソード記述法（鯨岡，2005）や語り合い法（大倉，2008；2011）などの間主観的アプローチが有効だと考えられる。

3.2. エピソード記述法・語り合い法

エピソード記述法はその研究フィールドにおいて動く人の“思い”，現場の“生き生き感”，人の生のありようを描き出すための方法である。エピソードとして提示されるものは、単なる行動記録ではなく、その場に身を置いた観察者にその出来事がどう感じられたかという間主観的要素や、観察者がどのような思いでそこにいたか、そのエピソードが出てくる背景は何かといったことまでが盛り込まれ、それによってそのエピソードの質感や意味を読者に伝えようとする（鯨岡，2005）。一方、語り合い法は、大倉（2008；2011）がアイ

デンティティ研究において、今を生きる青年を既成の概念に当てはめ「説明」するのではなく、むしろ一切の学問的枠組みを一度保留し、素朴に彼らに付き合ってみることで、青年が青年期をどう生きているかを「描出」し、その内面世界に迫ろうとした方法である。

従来の客観主義の立場からは、こうした研究法は客観性に欠けるという指摘がなされうる。しかし大倉（2001）は、語られた言葉だけを提示し、それについての「客観的」分析を試みる従来の研究に触れながら、次のように述べる。

“語り手の言葉の意味とはそもそも聞き手、話し手双方が抱える価値観や世界観、常識、語彙体系、社会的文化的背景、これまでの経験、さらには両者の関係性やその場における雰囲気、文脈、それが語られる調子やトーン、そこに交えられる身ぶりや表情といったありとあらゆるものの上に、一つのゲシュタルト的なまとまりとして「感受」されるものだ。”（大倉、2001）

つまり、一見「客観的」に見える語られた言葉のみの呈示、分析についても、実は上記のような種々の前提条件に大きく左右されるというのである。読み手が研究者というフィルターを通してしか事象に触れることができないことを考慮すれば、読者側が本当の意味で語りの意味を受け取り、その先に続く理論の妥当性を判断するためには、それらの前提条件や研究者に「感受」されたものそれ自体を、むしろ積極的に呈示しなければならないということになる。そしてそうした「感受」されたものの呈示が都合の良いデータ改ざんと区別されるためには、自然科学的研究手法と同様、研究者の倫理と自制心が求められることになる。

こうした考え方は、デイケア通所者の行動や語りの意味を把握し、それを読者に正確に伝えようとするときにも当てはまると考えられる。すなわち、単に通所者の行動や語られた言葉のみを提示して、それを「客観的」に分析していくのではなく、現場でその言動を見聞きしていた筆者にそれがどう感じられたか、どのようなものとして立ち現れたかということと併せて考察することによって、読者に対して通所者のありようの質感を伝えるとともに、その変化の意味を（読者と筆者の）

共通地盤の上で検討していくことが可能になると考えられる。

このような理由から、本論文の目的に応えるためには、語り合法の発想を活かした半構造化インタビューとエピソード記述法を併用するのが妥当だと考える。半構造化インタビューを採用するのは、偶発的なエピソードの出現を待つエピソード記述法のみでは、限られた時間内で十分なデータがそろわないと考えたためである。同じことは非構造的な語り合法についても言え、協力者の自由な発話に委ねるだけでは、限られた時間内で有効なデータが得られない可能性がある。協力してくれたデイケアの院長と相談の結果、協力者（通所者）の負担を考慮すると30分という枠を設定することや、質問の事前通知をすることが必要であるという判断に至ったこともあり、一定の質問をあらかじめ用意する半構造化インタビューを採用することとした（ただし、分析・考察に際しては語り合法の考え方を活かすこととする）。

なお、事前に用意した質問項目は、デイケアについての印象や協力者本人の家族のこと、未来への展望などであった。

3.3. フィールド

筆者は3年半ほどJ市のA医院（小規模デイケア併設の心療内科・精神科診療所）にスタッフとして勤務しており、最初の2年は受付事務、3年目からはデイケアスタッフとして看護師や精神保健福祉士らと共にデイケア（以下、デイケア α と表記）の運営に関与している。本論文ではこのデイケア α を調査フィールドとした。

A医院は個人診療所で、1階に診察室や面談室が、2階にはデイルームがある。デイケア α は居場所型デイケアであり、60-70種類の豊富なプログラムがある。毎週決まった曜日と時間に繰り返される書道やお抹茶、カフェなどのプログラムもあれば、月に一回、あるいは一回限りのプログラムもある。全体としてはレクリエーション系が多いが、悩み事を話し合うプログラムなどもある。デイルームは建築そのものが家のお茶の間のような雰囲気、週に三回、一緒に料理を作って食べるプログラムがあることや、デイケア全体の空気

感がゆったりとしていることが特徴で、基本的には共に過ごす、共に生活することを大事に全体が動いているように見える。また、通所者（以下メンバー）からも、スタッフとメンバーの間に隔たりがない雰囲気や、行動の自由が多い部分を気に入っている、という声が度々聞かれた。なお、デイケアαにおいて筆者は「一番若い女性スタッフ」、「心理の勉強をしている学生さん」という共通認識をメンバー、スタッフ双方から持たれている。

本調査は院長の許可の下で行い、適宜院長や専門職スタッフに相談しながら、協力者の安全や権利の確保・保護などに十分注意を払って実施した。インタビュー協力者はデイルーム内で募集し、希望者のみを対象とした。インタビューにあたっては日本心理学会の定める倫理規定を参照の上、事前に個人情報保護、調査中断の権利などを説明し、同意を得た上で行った。また、筆者がスタッフとしてではなく研究者として今回の調査を行うことも、協力者に事前に伝え、了承を得た。

4. 結果・考察

4.1. エピソード

エピソード①「僕なんかがね、一番前を泳いだりするわけなんです」

〈背景〉

布井さん（仮名）は細身で人の好さそうな、誠実な印象を受ける40代の男性メンバーで、不安障害と診断されている。彼は決まった曜日にデイにふらっときて、大半の時間をソファの上で過ごす。デイにはのんびりしに来ているようで、気が向くと自然とプログラムに混じっている。筆者と彼のかかわりの多くは、ゆったりソファに座ってくつろぎながら、互いの日々の話や、近所のおいしいお店の話をする事である。また、彼がソファで筆者に語ることの中には、彼のこれまでの歴史も、たびたびちらついていた。デイでできた友人と行ってみたスイミングが、もう3年も続いていること。元々太っていた身体は、すっかりやせたこと。家人との日常、ギターを始めたきっかけ……。そうしたことを、となりで楽しそうに笑

いながら語る彼。その姿からはにわかには想像しがたいが、以前は身体も太って、うつは重く、放っておいたら自死の危険があったために、デイケアの通所を促された人だ。そんな過去は、いまの穏やかなソファのやりとりにはみじんも見えない。ある日のソファで、彼が語った水泳の話。それをエピソードとして紹介したい。

〈エピソード〉

ある日のお昼過ぎ。午前のプログラムが終わって、筆者が布井さんの隣でひと心地ついていたときのことだった。筆者は隣の彼に、「最近も水泳通ってるんですか?」と会話の第一投を試みる。「変わらず通ってますよ」と返ってきたので、ゆるゆると、水泳の話題が広がっていった。

「なんかね、水泳も結構奥が深くてね、フォームによって水の抵抗とかが変わるから、本当に疲れとか速さとか全然変わるんですよ」

彼はまるで少年が新しいものを発見したときのような顔で、語った。筆者自身もスポーツをしているから、少しの違いでパフォーマンスが大きく変わることを、「それすごいわかります」と実感を含めた同意をして、楽しく応じていた。布井さんはそれを聞いてかは分からないが、身振り手振りもつけて、嬉しそうに話を続けた。そんな嬉しそうな彼に、こちらもつられて、自然と笑顔になる。

「それでね、こう50メートルのプールがあって、歩いてる人もいるんですけど、泳ぐ人たちもいて、そうなる必然的に速い人が先頭になるんです。後ろから速い人が来たら、前を譲る、みたいな、そんな暗黙の了解があって」

「うん、うんうん」

「それで、まあ僕なんか大したことないんですけど、でもこうやって泳いでいると、だんだん速くなって、なんか、前を譲ってもらいうちに、先頭になることもあったりするんですよ」

布井さんは、ちょっと恥ずかしそうに、で

も、とても誇らしそうな、そんな顔で語っている。それは、聞く者の胸をもあたたかくするような、純粋な喜びに満ちていた。

「体力ないんで、すぐ先頭譲っちゃうんですけどね。でも僕なんかでも、先頭で泳いじゃったりするわけです」

そう言う彼は、照れくさそうにしながらも、やっぱり抑えがたい喜びがにじんで、とてもホクホクとした顔をしていた。大人の控えめさがその感情を何とか覆ってまとめようと機能しかけているけれど、やっぱりどこか、子どものような澄んだ喜びが溢れていて、それが自然と、こちらにも伝わってくる。彼が筆者にそれを報告する様子には、どこか、子どもが家に帰って来て早々「今日初めてさかあがりできたんだよ！」と、興奮して養育者の背中に飛びつくような、そんな喜びが滲んでいる気がした。自分でも自分が誇らしくて、きらきらしたものとして感じていて、そのきらきらが、彼の周りの空間にまで舞っているようだった。

彼は、ひとしきり水泳の嬉しい報告をしてくれた後に、のんびりとした柔らかい表情で、「僕ね、そろそろ働こうかなーなんて思っで、今ちょっと探してみてるんですよ」

と、やっぱり嬉しそうな顔をして、付け加えた。それを聞いた筆者は、なぜか、頼もしいような、安堵するような、そんななんとも不思議な気持ちになったのだった。

〈メタ考察〉

・布井さんにとっての水泳

まずは、彼にとっての水泳について考察したい。布井さんが水泳を始めた背景は、それまで仕事をやめて引きこもっていた彼を、デイのメンバーが連れ出したことをきっかけにしている。そのメンバーは泳ぐのをやめてしまったけれど、布井さんはなんだか性に合っていたみたいで、週に1、2度の水泳はもう3年も続いている。その3年の間に、彼は結婚もした。

彼が何となく始めた水泳は、改善や試行錯誤を地道に積み重ねていくと、少しずつ、目に見える

形で、泳ぎやすさや、速さが変わっていったようである。そしてその結果として、彼はある日泳いでいたら、すいすいと、次々前の人を先を譲ってくれて、いつの間にか、先頭を泳いでいたのだろうか。彼はそれに最初、とても驚いたのではないだろうか。言っていた通り、「自分でも、先頭に立ったりなんかするんだ」と、彼にとって一番前に立った、ということは、こつこつ歩いてきた道がある点まで到達したことや、周囲の人にも自然と認められていたということである。

それは彼にとって、世界がまるで違って見えるほどの衝撃だったのではないか。身体は重く、うつの症状はひどく、仕事もなく、家に居るだけの生活をして、もう死にたいと思っていた自分が、水泳に惹かれ、夢中で泳いでいるうちに、いつの間にか、先頭を泳いでいた。以前の重苦しい自分とは全く違う自分が、今ここにいる。彼は先頭に立った時、そんな自分に、そんな風になるまで歩いてきた自分の道のりに、気付いたのではないだろうか。きっとその時の彼は「発見した」ような気持ちだったのだろうが、それは、すでにそこにあったものに、「気付いた」瞬間だったのだろう。そして、「自分だって、こうして先頭に立てることがあるのだ」と、そんな今そこにいる自分への、純粋な喜びや、自信が、湧いてきたのではないだろうか。

彼は別に、先頭に立つことを目標に泳いでいたわけではなかったのだろう。もちろん、立てたらいいなあ、くらいは思っていたかもしれない。でも彼は、そのために泳いでいたのではない。彼は、水泳そのものを楽しみながらやっていたから、あれだけ純粋な、喜びの表情を見せてくれたのではないかと思った。

・筆者が感じた、頼もしさと安堵

彼がひとしきり、ある日の水泳で出会った感動を語ったのち、ふとこぼれた、ゆるりとした声の、「僕ね、そろそろ働こうかなーなんて思っで」という言葉。それが筆者にもたらした、頼もしさと、安堵の感慨。これについても考察していきたい。

デイケアのメンバーから「働きたい」という言葉が出るときは、現状への焦りに突き動かされていることが多い。本当は、一週間のうち半分は起

きられないくらい症状が重いのに、自責や、周囲からのプレッシャーによって「働きたいんです」と口をついて出る。その「働きたい」を聞くととき、筆者はいつも、心配になる。働きたいと言う彼らは、とても必死で、現状を変えようともがくけれど、自分の体調を顧みない。彼らが今するべきは休み、癒されることであるはずが、それを全部すっ飛ばして、おおよそ渡れない向こう岸を目指して、谷へ飛び込もうとする。そんな姿が見えるようで、不安を煽られるのである。しかし、布井さんの「働こうかなあと思ってるんです」を聞いたとき、筆者は不思議と、何か、ほっと、安心するような心地がした。その安心は決して、「ようやく働くんだ」というような、帰結への安心ではなくて、むしろ、その「過程」への安心だった。この安心について、以下で深めたい。

布井さんの「働いてみようかな」は、彼が水泳を楽しみ、地に足をつけて、歩き続けた先に、自然と生まれたものである。それは彼がひとつひとつ、目の前のことを楽しんで、自発的にやってきたことであって、誰かに方向づけられて、本人の意志を離れたところで重ねたものではない。そして機が熟し、彼の自信になる瞬間があって出てきた「働いてみようかな」なのである。楽しいことを見つけてやっていたら、いつのまにか、こんなこともできるようになっていた。彼はそんな自分を発見したから、自然と、次の場所へと足が向いている。そうした過程を彼が歩んだということ。それ自体が彼の頼もしさとして感じられ、そんな過程を歩んだ者から出た「働いてみようかな」は、安心して聞ける心地がするものだったのである。

彼は水泳を通して、自分の生の中で「楽しむこと」を知ったのだろう。そしてその先に、たまたま「働いてみようと思うんです」があっただけのことなのだ。それは、別に植物の栽培でもよかったし、旅行だってよかったのである。それがどんな選択でも、水泳を楽しんだ彼の進む先には、深い谷ではなく、地面がある。次はこんな場所に行ってみようか、と、健康的にその進む先を自分で決められる。そんな頼もしさがあったのだった。もうほとんど息絶えてしまいそうだった彼が、少しずつ、少しずつ、自らの内のエネルギーを引き

出した道のり。それが、頼もしさと安堵を覚えさせたのであった。そして、そんな彼にとってデイケアがどんな場所としてあったか。それを物語るような、ちょっとした場面が後日あったので、短いが以下で紹介したい。

エピソード②「全然そういう、思い出とかないんです」

デイケアの全体企画で、メンバーそれぞれの、デイケアへの思いを聞いて回る機会があった。筆者が布井さんに、デイの思いなどを聞き出していたときのことである。筆者が彼に「何か、デイで特に思い出に残っていることとか、ありますか?」と問いかけたときの、返答のエピソードが以下である。

「デイでは僕、全然そういう、思い出とかないんです」

同じ質問を他のメンバーにすると、大体、どこに行った、あれが楽しかった、そんなことが一つや二つ、次々と出てくる人も多い。しかし布井さんは、そんな思い出はない、との一言。彼は決して冷めた響きでそれを言っておらず、相変わらず穏やかな様子である。

「でも、僕はそれがいいなと思っています」
彼は、そう言って、にっこり笑った。

「昔ね、しんどかったときは、職場でも会話とか全然なくて。誰かと会話するっていう発想がなかったんです。人と話すなんて、きっと普通のことなんでしょうけど、それが全然できなくなってしまったから、ここにふらっときて、雑談したり、ゆっくりしたり、それができることがすごく有難くて。だから、デイのイベントで、どこか行ったりとかしないんだけど、ここがあるから、自分が行きたい場所に、自分でいける。ここはそんな場所です、僕にとっては」

少し照れ臭そうに、彼は語った。そして「この前、ずっと行きたいと思っていた神社に行けてね、その時の写真です」と、嬉しそうに笑って、それを見せてくれたのだった。

〈メタ考察〉

デイでは、旅行に行ったり、遠足にでかけたり、毎月何かのイベントがあって、それに喜ぶメンバーも多い。しかし布井さんにとってデイは、どこへ行った、何をした、という行為を通して語られるものではなかった。たまにふらっと寄って、ソファでコーヒーを飲んだり、南向きの窓のそばに座ったり、だれかと他愛もない話をしたりして、そこで、過ごす。そんな人との交流の自然発生を、ゆったりした空気の中でなんとなく、デイケアの場は保障している。いつもそこにあって、いつでも行ける場所として、そこにある。そんな場があったから、彼は水泳に行き、それに行きつづける力も、得ていたのではない。こうした場の存在が、彼が穏やかに笑い、次の場所へと足を動かす原動力となっていた。更にそうした経験の積み重ねによって、自分自身の中にもデイケアの空気感を取り込み、自分の基盤にしていっているのではない。そうして彼は、神社に行ったり、おいしいお店に行ったり、働く場所を探してみたり。そうして、好きなように、この世界を歩きまわっていっているのだろう。

4.2. インタビュー

インタビューはA 病院1階の面接室で行った。時間は30分と決め、事前に通知してあった質問に触れつつ、その場の雰囲気や疑問として湧いたことを素朴に聴いていくという流れを取っている。また、インタビュー時のやりとりは許可を得て録音し、終わり次第文字起こしを行った。その際に、逐語録だけでは伝わらないと思われるインタビュー時の身振りや手振り、空気の質感なども付記し、それを含めてデータとして扱った。

また語り内の表記については、語られた言葉の提示だけでは意味の取れない場合、補足的情報を括弧付きで示した。

〈仁井さん（50代女性・うつ）〉

仁井さん（仮名）は3年ほどデイに通所する女性メンバーで、繊細な感性と、芯の強い感じの態度を併せ持つ、小柄で可愛らしい女性だ。彼女は一般就労の経験も長く、デイケアに来る以前は長

年作業所Tに通所しており、インタビュー中も、作業所との比較を通してデイケアを語る場面が多かった。

彼女が共同作業所だったTへ通所を始めたのは、家にいるだけだと塞ぐので、会話や居場所を求めてのことだった。しかし障害者自立支援法の成立を受けて作業所TがB型へ移行すると、途端に作業中心主義に変化していったという。例えば、スタッフが通所者の「自己責任」をことさら強調すること、B型移行後は休憩所やソファもなくなり、作業中のちょっとした会話も叱責されること、病状が悪く作業ができないメンバーにスタッフが「他の人のモチベーションが下がる」と責めること、メンバーの気持ちよりも作業所としての成功優先の事業展開をしてきたことなど、長年通った作業所のエピソードは尽きなかった。彼女が特に苦痛をにじませながら語ったのは、スタッフがメンバーの苦しみを理解しようとしないう態度だった。作業所でのおでかけのとき、あるメンバーが「満員電車しんどかった」、とぼろっと口にした際、スタッフは「そんな普通の人は普通に乗って仕事してんねんで!」と言ったという。仁井さんはそれに対して、感覚が違うんやな、という気持ちになったことを、失望と悲しみを込めた声で語った。

仁井さん自身も満員電車に乗ったり、外で食事をしたり、人前で演奏したりができないのだが、それは、「したいけどできない」ものである。それに対して「乗れないことは、大丈夫、じゃなくて、乗れへんことが普通じゃないねんで、って言われることって全然違う」と彼女は失意の声で語ったのだ。彼女はとても敏感に人を見てそれをキャッチする人なので、むしろそうした何気ないところにこそ、その人の考えが如実に表れるように感じるのかもしれない。「普通の人是可以する」、そんなことは、きっと本人が一番よく分かっている。だからこそ、それができないことを自責したり、無理解にさらされたりして苦しい。だが、本来は自分たちの病気を理解してサポートしてくれるはずのスタッフからも、「普通じゃない」こと、できないことを欠如として責められるように指摘されては、理解者のいない苦しみを抱

えて生きていくことの絶望や不安を感じてしまうのではないか。

作業所への失望や不信感が重なり、彼女は3年ほど前からA医院のデイケアに通所を始めた。そこで彼女が感じたのは、作業所Tでもデイケアでも言われる「大丈夫」という言葉から受け取る、全く違う意味だった。その語りの部分について、逐語録と考察を2つのセクションに分けて提示したい。

なお、以下の語りの提示に当たって、「に」は仁井さんを、「こ」は調査者（近藤）を表す。

〈2つの全く異なる「大丈夫」〉

に「〔中略〕デイに来てからは、デイで…、作業所で…今まで自分ができひんかったことしようと思っても、どっかにいつも『自己責任、自己責任』って、『もういやー！』って言うほど言われていたんで、その、『大丈夫』、って言う……その、（手をぱっと前に出して、突き放すような強い口調で）『大丈夫』と（手を隣の人の肩に置くようにして、やさしい口調で）『大丈夫』の差ですよ」

こ「ああ～～～手で、押していく…」

に「こう、押していく、『大丈夫やで』って、後ろからポンって肩押される『大丈夫』と、『守ってあげるよ』っていう、『なんかあっても大丈夫』っていう、安心感がある『大丈夫』とでは、全然、やっぱり、不安感の大きい私にとっては全然違う……んですよ…うん」

こ「うーん…なるほど…うん。その、（抱きかかえるような動作をしながら）『大丈夫やで』って、この、包む方の『大丈夫やで』って言う方は、まあ、確かに、私もデイでは感じてはいるんですけど…。その、どう…なんなんですかねえ？こう、どういうところで…感じてるんだらうっていうのがすごい…」

に「こうねえ、『大丈夫やで！ほらできたやん！』って後ろから横から肩叩かれるので

はなくて、（柔らかく）『大丈夫やーん』って言うて横並びで」

こ「ああ…なるほど…」

に「後ろから前に押すんじゃないで、横並びで喜んでくれる、できたら（拍手しながら）『やったー！』って言って手を取り合う、……温度感が、全然違うんですよ」

こ「ああ…なるほど…隣にいる、っていう」

に「そう！ですね」

こ「ああ—そうなんですね…。こう、後ろに、立たれて押されたり」

に「そう、押されて」

こ「孤独」

に「そう孤独なんですよ」

こ「なる……………」

に「振り向いたらそりゃ「大丈夫」って言うてくれるのかもしれないけど、その一歩が踏み出せへんから……病気のこと……、やっぱり、一歩が、すごく怖いじゃないですか」

〈考察〉

この話を聞いているとき、筆者は、自分に強い感情の揺れが起こるのを感じた。そのため、一度語りを区切って、考察したい。

・筆者の感情を揺さぶった、彼女の「怖さ」

仁井さんが、「振り向いたらそりゃ『大丈夫』って言うてくれるのかもしれないけど、その一歩踏み出せへんから」と一気にまくしたてて急に、まるでそこまで歩いていた地面がすこっと抜けるような、急にぶつっと空いた、深い穴のような間。言葉も思考も感情も、そこに吸い込まれてしまうような、そんな静寂の穴には、それまでのまくしたてるような勢いとは全く違う、心もとなくさみしい声の「…病気のこと……。やっぱり、一歩が、すごく怖いじゃないですか」という言葉が流れ込んだ。その言葉を語るときの仁井さんが、とても小さく見えて、彼女自身もその空白の穴に吸い込まれてしまうのではないかと思うほどだった。その静寂の一間の彼女の言葉、語り口、様子、そこにいる仁井さんのありかたがそのまま、彼女

の怖さそのものを表しており、筆者は、もっとも無防備で純粋な彼女の生（なま）の怖さに触れてしまった気がした。そしてその生（なま）の怖さのありようがあまりに孤独で、心もとなく、さみしく感じられ、それが仁井さんの抱える大きな「怖さ」を言葉以上に物語っているように感じた。それを前にして圧倒されたからこそ、感情が強く揺さぶられたのだろう。そして次の瞬間には、それをなんとか受け止めたいと思いつつも、どこかで自分の未熟さでは到底受け止めきれないと愕然とする筆者がいた。彼女の、静かで寂しい「怖さ」に対して、自分ができる反応のどれもが、薄っぺらい気がして、そんな反応しかできない自分が、仁井さんを落胆させたり、悲しませたりしたらどうしよう、という焦りにも似た感情もあった。それでも、彼女がこの場に表してくれたその純粋な「怖さ」を、未熟な自分なりになんとかして、受け止め応えたい。もっと彼女が感じていることを知りたい。そんな思いで続けたのが、以下である。

〈待つてくれるデイケア〉

こ「うん…そうですね…だし……こう、なんだろう、イメージですけど、こう…この一歩を踏み出せなかったら、ここにいちゃいけないんじゃないかみたいな」
に「そうそうそうそう」
こ「みたいな、こう、強迫感」
に「(強迫感、と聞いたとたんにすぐ) うんうん」
こ「(強迫感) みたいなのが、なんとなくね、感じそうですね…」
に「で、それでいて、その、デイは、できひんかって、その、そこをしつこく言わない。やってみいひん？やってみいひん？って言われな」
こ「(深い納得を込めて) ああ～」
に「その、自己性を大切にしてくれはるところ。その方が、できるんですよ」
こ「ああ～…なるほど」
に「うん」

こ「うんうんうんうん」

に「やってみいひん？って、こう、またこう、手を引っ張られるよりも、もう一回自分の中から出てくる、やってみようかな、っていう気持ちを、いつまでも待つてくれる、度量の大きさが、デイにはあったんだと思うんですね」

こ「(感じ入るように) うーん…」

〈考察〉

筆者は愕然とした思いを引きずりながらも、自分自身を仁井さんの体験に重ね、想像を及ぼせながら、言葉を紡いだ。もし、一歩を踏み出すことを恐れる自分が簡単に『大丈夫』だなんて言われたら、その一歩が踏み出せない自分はここにはいけないと感じるくらい、その言葉を強迫的に感じると追体験されて、出てきた言葉だった。仁井さんは「そうそうそうそう」と同意した。筆者はその同意を得て、なんだかとても、落として壊してはいけないものをなんとか運び終えた人のような気持ちになって、ぎりぎりまで張りつめていた糸がようやく緩み、長い息を吐きたくなるような思いがした。

以下では、主に同じ2つの「大丈夫」という声掛けの全く異なる体験を中心に考察する。

・作業所Tの「大丈夫」

彼女が重ねてきた作業所のエピソードと、「大丈夫」の違いの語り。そうしたことから、2つの「大丈夫」の大きな違いが、追体験可能な水準まで煮詰まってきた気がした。言葉は同じ「大丈夫」でも、手を前に押し出す、突き放すような口調の「大丈夫」を仁井さんが表現したとき、筆者は何かぞっと背筋が凍るようなものを感じた。そのぞっとした感じはどこから来たのか。彼女の語りから自然と連想された最初のイメージは、真っ暗闇の中、もうその先の足場があるかもわからないような高い崖の上で怯える人である。その人のすぐ背後には、別の人がいて、その後ろの人は、自分だけ後ろの安全なところに隠れて、何の確証もないのに、「大丈夫」と、無責任に目の前の背中を、押ししている姿だった。それは、矢面に立たされる本人に、どれほどの恐怖と孤独を与えるだ

ろう。暗闇に立つ本人からすれば、一人で、ともすれば崖から落ちるかもしれない、大げがでは済まないかもしれない恐怖があるときに、何の確認もなく、どこか強迫的な態度で背中を押されることは、あまりにむごい。しかし仁井さんはきつと、そんな体験をしたのだ。それが分かった気がしたから、筆者は背筋が凍るような感覚を覚えたのであろう。

・彼女の「不安感」

仁井さんは自分のことについて不安感が大きいと言ったが、これは彼女の家庭背景が密接に絡んでいる。彼女の家は出入りが激しく、幼い頃から「大人のドロドロの中にいた」という。親からのネグレクトがあったことも語ったが、「サバイバル精神豊かだったんで」と前置いて、小学生の時には自分で自分の食事を作り、学校に行っていたという。当時は何も思わなかったと振り返るが、そうした経験の中で気づかずに蓄積されてきたものが後年になって、「ものすごーい不安」として出てきたのだという。おそらく彼女は幼い頃から、安心感よりも守られなさの方ばかりをたくさん経験してきて、無意識に募る不安感に負けないよう、戦い続けてきたのだらう。サバイバル精神豊かという、タフで好戦的な印象の言葉だが、彼女の言うサバイバル精神は、存在をかけた必死の戦いを、からがら生き抜こうとする態度のことだったのではないだろうか。その闘いの中でたくさんついた傷が、今の彼女の大きな不安感として、表れているのではないだろうか。

仁井さんに今実際に起きている苦しみは数多い。その中で、地下鉄やバスに乗れないとか、人前で食事ができない、とかいったことは、それが当たり前前にできる人にとっては、あまりに日常的で些細に見えることである。しかし仁井さんにとっては、地下鉄のホームに立つことと、ひとり暗い崖の上に立たされていることは体験的にきつとほとんど同じなのだろう。そして、不安感の強い彼女に対して、その恐怖を理解しない者が無責任に「大丈夫！」と背中を押すことや、「普通の人には乗れんねんで！」と言うことは、彼女にとってあまりに辛く、ショックの大きいことなのである。

・デイケアαの「大丈夫」

仁井さんは、デイについて、「できひんかって、その、そこをしつこく言わない、やってみいひん？やってみいひん？って言われたい」と言及したが、それは暗に作業所Tではそういうことを言われていたのかなと想像される。その真偽は定かではないにせよ、できなかったことを「しつこく」言うことや、本人の気持ちを置いていけぼりにした誘いかけは、遠回しに「できない」ことに追い打ちをかけるように否定することになる。そしてそれは崖に立つものを無遠慮に追い詰める行為として受け取られるものだろう。

デイの「大丈夫」について仁井さんは何を言おうとしていたのか。彼女曰く、デイの「大丈夫」は、「『守ってあげるよ』っていう、『なんかあっても大丈夫だよ』っていう安心感がある」ものである。この場面で「大丈夫」と言ってくれる人は、肩を抱くようにして隣にいてくれており、たとえば彼女が暗闇の崖の上にいるような気持ちでいたなら、そこが暗闇や崖ではないこと教えてくれたり、もし怖いなら一緒に手をつないで進んでみよう誘ったりする存在なのだろう。それはつまり、後ろから無責任に背中を押すのとは、全く異なる存在である。そしてそうした、隣にいて手をつなぐような態度は、例え失敗しても、穏やかなままである。無暗に手を引くこともなく、次の一歩が自然と出るまで、ゆったりと待っていてくれる。喜ばしい変化には、その嬉しさを一緒に共有する。そうした他者が隣にいてくれること。それは決して自分を見捨てたり、責めたりすることなく、自分が安心して、そこに居られる場所である。彼女はそれを「度量の広さがある」と表現し、そうした環境を彼女は「自己性を大事にしてくれる」態度だと受け止め、「その方ができる」のだと語っている。

・デイに通所して得た変化

彼女にとってデイケアαは一様に先導して率いるのではない、隣で共に歩いてくれる他者を感じられる場所である。「その方ができる」と彼女が語った通り、彼女は数年の通所の間に、「何十年とできなかったことができるようになった」。デイケアのスタッフと地下鉄やバスに何とか乗れ

たこと、怖かった外食も、まだ食べることは難しいながら、その場に参加できたこと、そして人前で演奏すること、特に演奏については、できなかったということが信じられないくらい、デイルームでのびのびと演奏する姿をよく見せてくれる。そのとき彼女は、とても気持ちよさそうに、嬉しそうに、演奏しているのである。自ら楽譜をスマートフォンで検索し、メンバーと一緒に、即興で演奏してくれたこともあった。

何十年とできなかったそれらのことが、デイの通所を通してできるようになった。彼女はやはりそれを、「安心感の違い」だという。その安心感とは何なのか。それは見捨てられることも、責められることも、無理に手を引かれることもなく、自分の次の動きをゆったりまなざされながら、隣で待っててもらえる、そんなあたたかさのことではないか。デイケア α が彼女にもたらしたのは、今までの彼女にとって得難く、ずっと欲しかったものだったのだろう。したかったけれど、怖くてできなかった、たくさんのこと。それは一様な先導や抑圧では、開花させられないばかりか、苦痛ばかりを増やし得る。仁井さんはデイケアにきて初めて、ゆったりと隣にいる他者を感じ、そのぬくもりの中で、自分のやりたいことを、楽しんで発揮していつているのだろう。

5. 総合考察

4では、居場所型デイケア α における布井さんのエピソード、仁井さんのインタビューを考察と共に提示した。総合考察では、居場所型デイケアと囲い込み施設、あるいは目標・目的志向型との質的な違いについて論じる。

5.1. 居場所型デイケアを経た2人の通所者

まずは布井さんの事例を振り返る。彼の水泳は、何かの目標のために先導されたものではなく、また本人も、特に目標や目的を決めて取り組んでいたわけではない。彼はデイケアの友人に誘われるまま水泳を始め、純粋に水泳を楽しんでいた。デイケアにきて誰かと話し、泳ぎ、暮らす。そうしたことの繰り返しの中で少しずつ、自らの足であ

ちこちを歩き回る力を蓄積しながら、ある時ふと、歩んできた道なりに気付いたりもしてきた。その過程の背景にはデイケアの存在があるが、それは決してデイケアで「〇〇ができるように決めたこと」や「具体的な取り組み」を理由にしたものではなかった。強いていうなら「何でもない会話」や「ゆっくり」という素朴なものが生まれ、そこにありつづけることをただ保障する場として、デイケアがあったこと。それが布井さんの変化の基盤となっていたのである。そうした変化は、誰かの先導や圧力によってできたものではなく、言わば彼の内側から自然と生じてきたものである。彼は働いてみようかな、と口にしたが、それは焦りや規範意識から来ているものではなく、これまでの歩みの自然な延長上に出てきたものであった。

次に仁井さんの事例を振り返りたい。家族、仕事場、作業所。彼女が今まで身を置いてきた環境の中で、彼女が安らぐことは、とても難しかった。そうした経験の蓄積が彼女の不安感としてあるのだが、そんな彼女にとって、「普通はこれくらいはできる」、「できないならここにはいけない」といったプレッシャーをかけるようなメッセージは非常に苦痛なものであった。また、彼女は行為水準としては同じ「大丈夫」という声掛けの、全く異なる2つの様相について語ってくれた。気安く背中を押されるような「大丈夫」は、不安の大きな彼女にとって、無責任で残酷で、破滅を迫るようなものとして映った。しかしデイケア α にきて彼女が聞いた「大丈夫」は、言わば隣の他者が肩をそっと抱いてくれるような「大丈夫」であった。ちゃんと隣にいてくれる、まなざしてくれる、手をつないで、自分のことを待っていてくれる。それは、彼女の不安を少しずつ、やわらかく、ほぐしていったのだろう。自分を取り巻く厳しい状況を生き延びようとしてきた彼女にとっては、仕事場も作業所も、何かを獲得する、何かを達成する、孤独な戦いの延長であったのだと思われる。しかしデイケア α では、戦う必要がなかった。そこでは、誰かがあたたかく、隣にいてくれる。だから彼女も力を抜いて、そこに居ることができる。そうして初めて、彼女は不安でできなかったさまざまなことに、自ら臨んでいけたの

だった。

5.2. 囲い込み施設とのちがい

居場所型デイケアと単なる囲い込み施設は、全く異なる。例えば、ただ暇つぶしになるものを置いて、人をただそこに居させるような環境を与えただけで、布井さんの足は外へ向かっただろうか。仁井さんは、楽しそうに演奏しただろうか。決してそうはなるまい。部屋の設備だけを整えて、診療報酬稼ぎのために人をそこに放り込み、あとは放置するような囲い込み施設は、治療にならないどころか、治療の障害でさえある。誰かが自分に心を寄せ、隣りにいてくれること、優しく手を取って引き出してくれること。その温かさが、彼らの中にある自己治癒力を引き出していくのではないか。そうした温かさを生み出すためには、その人の病やその人自身をまなざす積極的態度が必要で、ただ通わせ、一室に囲い込み、あとは何もしないこととは峻別されるはずである。

こうしたかかわりや態度は、確かに施設基準や監査の基準、あるいは明確な行為の違いとして表現することは難しいが、実際は、そこにこそ支援の本質があると考えられる。仁井さんの事例で言えば、単純に「大丈夫」と繰り返せば通所者を支えることにつながるわけではなく、どのような構えや雰囲気のもとにその言葉を発するかによって、言われた本人がプレッシャーや疎外感を感じるのか、それとも安心感や安全さを感じるのかが変わってくるのである。

安心できる居場所があって初めて、人は自らの病、自分自身に向き合うエネルギー、人生を楽しむ余裕を蓄積していける。その安心感は、例えばふと笑い合える穏やかな雰囲気や、その人の「したいけどできない」という葛藤に対して、「できなくても大丈夫だよ」と柔らかく包み込むように隣にいて、できたら一緒に喜んでくれるような他者の存在や態度によって生まれるものであろう。そうした雰囲気や他者の存在に支えられて初めて、何かを試みようという気持ちが湧いて、自然と、自分の生の中に楽しみを見つけられる瞬間が増え、自ら動き出した気持ちにもなっていくのではないか。

5.3. 居場所型デイケアが支えるもの

支援者側が先導し、個の能力を高めさせるのではなく、通所者と同じ地平に立ち、寄り添うようにかかわること。そこに生まれる共同性が、通所者の重大な不安や苦しみを癒す側面があるのではないか。施設の掲げる作業目標や統一的目的に縛られることなく、その人自身をまなざし、同じ地平でかかわり合っていこうとすること。それが居場所型デイケアにおける基本的態度であり、大きな特徴ではないか。

そうしたかかわりがもたらす治療とは、病で消耗した身体にエネルギーが蓄積され起きてくる、自然な癒しや動きである。布井さんなら、ふと水泳を始めてみたこと、それが楽しくて、夢中になっていたこと。そうしていたらいつのまにか、身体も心も軽くなって、自然と次の場所へと足が向いたこと。仁井さんなら、隣にいてくれる他者の存在があることで、安心して、バスや地下鉄に乗ったり、歌ったり、したかったことを伸び伸びと実現していったこと。

治療とは決して生物学的・薬学的なものに限らない。むしろ、精神の病は対人関係の中にその根がある場合が多い。すると、こうした素朴で共同的なかかわりが治療として成立することは、ある意味では当然なことだとも言える。温かい共同的な対人関係を基盤にしてこそ、本人の根幹の部分にありながら、未だ十分に実現されていなかった可能性が、ゆたかに展開されていくようになる。そうした展開を支えることは、治療の重要な一側面であろう。さらに、仮にそうした変化・展開が通所者に起こってくるのだとすれば、それは単なる「治癒」という以上に、病の文脈を超えたその人の〈育ち〉であると言えるだろう。

5.4. 〈私〉が〈育つ〉場としての居場所型

精神の病は他の病に比して、病的な部分と個性のようなその人固有の部分とが密接に絡んでいる。そうしたひとりひとり全く異なる個に対する働きかけは本来少しずつ異なるはずで、一様に個体能力発達や直線的な縦軸の成長を求めることは齟齬を生んでしまう。個がその生を生涯をかけ、広がりや奥行きをもってゆたかに変化させていこうと

するとき、その変化は直線的というよりは寄り道や回り道を含む紆余曲折したもの、「縦に伸びる」というよりはむしろ「横に広がる」もの、あるいはらせん状に少しずつ進んでいくものになるのではなからうか。

布井さんや仁井さんにとって、デイケアαはそうした横の広がりやらせん状の漸進的な変化、そうした意味での〈育ち〉を保障するものであったのではないだろうか。そうした見方に立つなら、たとえ就労スキルを得て計測可能な個の能力が発達したとしても、生活に伴われる安心感や充実感が豊かなものにならなかつたり、それが本人にとって喜びとまらない変化だつたりするならば、それは〈育ち〉とは言えないということになる。

こうした〈育ち〉という観点に立つとき、必然的にこれまでの患者像を大きく転換せねばならない。すなわち、患者は、単に治される対象でも、能力やスキルを補われるべき「能力・スキル欠如者」でもなく、かけがえのない唯一無二の〈私〉として尊重される一人の人間である。ここでいう〈私〉とは、病をかかえる側面と決して病まない側面、あるいは苦しい過去を抱えているという側面と楽しいことを見つけて自由に生を展開させていく側面など、あらゆる側面を内包した一つの全体である。〈私〉は他の誰でもない唯一の存在で、生涯にわたる可変性に開かれた存在としてある。

つまりデイケアは治療であると同時に、そうした〈私〉を再発見し、その〈育ち〉を保障する場としてあるのではないか。それぞれの患者の生が、病の平癒も含みつつ、必ずしも病とかかわらない部分の維持・発展や、生きていくための基盤の再構築なども合わさったふくよかな変化を経ていくことを、支えているのではないか。

そしてそうした〈育ち〉には必ず、他者の存在が必要となる。他者に〈私〉がまなざされ、受け止められることは、自然と、患者自身が〈私〉自身をまなざし、受け止める基盤を形作っていくことへつながる。居場所型デイケアとは、そうした他者との出会いを保障する場なのである。

このような主張に対して、医療の役目は患者の〈育ち〉までを負うものではないという批判もあるかもしれない。しかし精神の病とは、身体的な

病と違い、明確な患部を特定できるものではなく、多くの場合、人との関係の在り方や患者が生きてきた歴史の中にその根を持つ。隣に一人の人間としての〈私〉をまなざす他者がいること。何でもない会話や、ゆったり安心できる場所があること。そうした環境で〈私〉が〈育つ〉ことを通して、自然と病の根そのものが癒されていくということがあり得るのではないか。

そうした居場所型デイケアの実践は、あまりに素朴で、一見何をしているか分かりにくいかもしれない。また、それぞれの〈私〉の〈育ち〉の展開は多様であり、「こうなれば治癒である」といった統一的基準で測ることもできない。しかし、居場所型デイケアの本質とは、〈私〉の〈育ち〉を支えることによって、患者本人から無理のない健やかな形で「したい」というエネルギーが湧いてくるのを待つことにあるのだと言えるのではないか。

5.5. 居場所型デイケアが現行の支援動向に投じる一石

目標・目的志向型に傾いた現在の動向の中で失われたもの、あるいは見落とされてきたものを、居場所型デイケアの実践は教えてくれているのではないか。現在、医療と福祉の現場は密接に重なり、絡みあっている。医療においても福祉においても、治療・支援を受ける患者個々の〈私〉へのまなざしをもたずに、能力やスキルの足し算で補うべき対象（能力・スキル欠如者）としてまなざし、治療者・支援者側の主導で当事者の手を次へ次へと引いて挑戦を促すならば、当事者が〈私〉としてこの世に居て良いのだと安心感を持つことも、その土台の上に〈育ち〉を展開させていくことも難しくなるだろう。

困り込み施設と異なる居場所型デイケアの実践とは、利用者個々の〈私〉をまなざす他者のいる場を保障し、一様ではないそれぞれの〈育ち〉の展開を支えるというものである。それは現行の患者像や、それに根差した支援の一大潮流に対して、一石を投じるものであると言える。居場所型デイケアの実践が重要なものとして連綿と受け継がれていくこと、あるいは居場所型支援ではない他の

実践においても〈私〉の〈育ち〉へのまなざしが取り入れられていくことが、今こそ求められていると言えるのではないだろうか。

5.6. 今後の課題

本稿で描かれたのは、居場所型デイケアの実践について、これまでの先行研究で取りこぼされてきた多くのものの一側面に過ぎない。居場所型デイケアで過ごす人々の動的な関係性や、その場の空気の持つ意味などにも、今後アプローチしていく必要がある。さらに、今回議論された「〈私〉をまなざす他者」とは何かといった点についても、今後議論の精緻化を図っていかねばならない。さらに、多様な施設があることを考慮するならば、他の居場所型施設や、〈私〉の〈育ち〉を少し違った仕方で促している他施設についても調査・議論していく必要があるだろう。

註

- 1) 松原玲子「国の施策にみる精神科病床数——厚生(労働)白書からみる我が国の精神保健施策の意図」日本社会福祉学会 第59回秋季大会
- 2) 厚生労働省 HP「医療施設動態調査(毎月概数)」平成8年12月,平成28年12月。
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/79-1a.html> (2017/3/31)
- 3) 「元患者証言, 通院やめられず 相談員「生活保護打ち切る」」産経ニュース
<http://www.sankei.com/affairs/news/150724/afr1507240004-n1.html> (2017/3/31)

引用文献

- 浅野弘毅(2015)『精神科デイケア学——治療の構造とケアの方法』。エム・シー・ミュージズ。
- 古屋龍太(2000)「精神科デイケアにかかわる政策的課題——特に診療報酬における評価と基準解釈、機能分化をめぐって」。『デイケア実践研究 4(1): 66-68』
- 原敬造(2016)「3 精神科デイケアは多機能型診療所の核である」。窪田彰(編)『多機能型精神科診療所による地域づくり——チームアプローチによる包括的ケアシステム』。金剛出版, 47-67
- 伊藤弘人(2013)「精神科医療政策の動向からみたこれからのデイ・ケア」。『デイケア実践研究 17(1): 60-64』
- 北岡美世香(2013)「居場所としての精神科デイケアの治療的意味」。『デイケア実践研究 17(1): 3-11』
- 窪田彰(2001)「診療所デイケアの課題と展望」。『デイケア実践研究 5(1): 35-42』
- 窪田彰(2006)「実践する精神科デイケア——精神科診療所から」。『デイケア実践研究 10(1): 80-84』
- 窪田彰(編)(2016)『多機能型精神科診療所による地域づくり——チームアプローチによる包括的ケアシステム』。金剛出版
- 鯨岡峻(2005)『エピソード記述入門——実践と質的研究のために』。東京大学出版
- 中村勝(2006)「精神障害者の自立支援を促進するための精神科デイケアに関する一考察——「改革ビジョン」と今後の精神科デイケア像」『デイケア実践研究 10(2): 170-176』
- 大倉得史(2001)「ある対照的な2人の青年の独特なありようについて」。『質的心理学研究 1(1) 88-106』
- 大倉得史(2008)『語り合う質的心理学——体験に寄り添う知を求めて』。ナカニシヤ出版。
- 大倉得史(2011)『「語り合い」のアイデンティティ心理学』。京都大学学術出版会
- 若林功(2012)「第5章4. 就労支援——連携と支援システムづくり」。上野容子・宮崎まさ江(編)『精神障害者の生活支援システム』p.127。弘文堂
- 山崎勢津子(2016a)「居場所における“デイリーケア”——プログラム, 大規模, 病院」。『デイケア実践研究 20(1): 61-64』
- 山崎勢津子(2016b)「今後の課題」。『デイケア実践研究 20(1): 65』
- 安井利子・野原将英・染谷康宏(1997)「誰でもいつでも来られるデイケア」。『デイケア実践研究 1(1): 53-58』

**Possibilities held by “the place of dwelling” model of day care
—— The treatment place of “development” of “self” ——**

Maho KONDO

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary The mainstream of psychiatric care in Japan has been leaning toward the “goal oriented” model, and this trend has been inducing disparity among, and alienation of, all mentally challenged individuals. On the other hand, the “place of dwelling” model, which flourished before the implementation of the Service and Supports for Persons with Disabilities Act, has been in decline because of the difficulty of distinguishing between malignant establishments, often labelled “enclosures.” This paper attempts to investigate the complex practices of “the place of dwelling” model, and make a distinction between this model and “enclosures,” as well as to re-examine the current mainstream psychiatric care. Finally, the author ascertained a difference between the “place of dwelling” model and “enclosures,” in terms of the attentive attitude of neighbors and the collaborative nature of relations. Moreover, it was revealed that “the place of dwelling” model places emphasis on “development” of “self”, and it is suggested to be of importance for today’s psychiatric care.